

第 15 回（2022 年）「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究奨励賞選考委員会

(1) 選考経過および選考結果

「昭和女子大学女性文化研究奨励賞」は、卒業生を含む若手の昭和女子大学関係者に対し贈呈するものである。

第 15 回研究奨励賞は、2022 年中に刊行された著作が対象であり、単行本 1 点が選考対象となった。第 1 回研究奨励賞選考委員会は 2022 年 2 月 8 日に開催され、選考対象について検討された。第 2 回の選考委員会を 2022 年 3 月 3 日に開催し、遠藤由紀子氏（昭和女子大学非常勤講師）の著書『会津藩家老・山川家の近代一大山捨松とその姉妹たち一』（雄山閣、2022 年 5 月 25 日）に、「第 15 回 昭和女子大学女性文化研究奨励賞」を贈呈することに決定した。

(2) 受賞作の選考理由

「女性文化研究所紀要」並びに昭和女子大学紀要「学苑」に発表した研究論文を骨子に執筆された本書は、第 50 回・2021 年度公益財団法人三菱財団人文科学研究助成に採択された「会津藩家老山川家の明治期以降の足跡に関する研究」の研究成果の一部である。また、本書の一部は、山岸良二編著『秋山好古と習志野騎兵旅団』（雄山閣、2019）にも所収されている。

本書は、序章に続く第一章から第五章までの本論と終章から構成され、全 293 頁にあとがきと参考文献を含む。序章に山川家の母と兄弟姉妹を通覧し、第一章には長女、第二章には次女、第三章には三女・四女、第四章には五女を取り上げてそれぞれの生き方を明らかにした後、第五章では山川家に嫁してきた女性たちの人生を、終章においては次男・山川健次郎の言葉を引いて、山川家の子女が各々「眼界を広く持て」たことを評価して終わる。

本書の受賞理由を、主に以下三点から述べる。

第一に、先行研究の他、私家版等の珍しい資料や関係者への取材から、山川家の姉妹たちと山川家に嫁いだ女性たちの幕末から明治にかけての足跡を辿りつつ、各々が新時代の教育、人材育成、社会福祉活動に貢献したことを評伝風に提示し評価した点である。山川家の子女では大山巖夫人捨松の存在が群を抜いて目立つが、女子師範学校舎監を長らく務め、女子教育に献身した長女・二葉、夫亡き後ロシア渡航で語学の才を磨き、宮内省御用掛として昭憲皇后に仕えた三女・操のように、実社会で立場を築いていった姉妹の他、北の地で初等教育に尽力する夫を支え続けた次女・ミワ、検事の夫について各地を転々としつつ家庭を守

った四女・常盤と、殆ど世に知られていない二人も同等に取り上げ、その生き方を丁寧に明らかにしている。各人物に対する資料・記録の集約という点でも、本書は評価できる。

第二に、山川家の姉妹たちのそれぞれの人生を追う中から、男きょうだいや姻戚までも含めて、壮大な親族ネットワークが形成され維持されてゆく様が了解される点である。維新によって辛酸を嘗めた会津出身の山川家の人々が、大きく様変わりした明治の世を生きていくためには、個々の能力や熱情もさることながら、血族・親族のつよい絆こそが最も必要且つ重要なものであった可能性は、本書を通じて強く感じられた点である。

第三に、本書は一般にも理解しやすい叙述で一貫されている点である。個人の人生に焦点を当てて語ることで、大文字の歴史では知りようのない多様な女性の生活が浮き彫りとなり、且つそれを読む者がある程度の共感・実感を伴って理解できる点は大きい。そこには、福島出身の著者が、自らの郷土にかける情熱的な思いに突き動かされるように調査する姿勢がつよく関わっていると思われる。

山川家の次女・ミワと四女・常盤については、まだ不明な点も多いとあることから、この二者については今後更なる調査報告が期待されるが、その他に今後の課題として述べたいのが以下の点である。

まず、本書は序章において「近代国家形成期を敗者の立場から明らかにすることで、新たな歴史像を構築させたい」と高い目標が掲げられているが、前提となる歴史像がどのようなものであるかの説明と、鶴ヶ城籠城戦や斗南移住のような悲惨な経験を経なければならなかった山川姉妹たちが、明治社会に貢献し得る立場にまで返り咲いたことにも関わるだろう点、本書に倣って言うなら〈勝者の立場〉のようなものが、明瞭には語られていないことである。併せて、「敗者の立場」で近代化に貢献したことをどう批評するかについては、更なる考察の余地があるようにも思われる。

また、本書はタイトルに「山川家の近代」とあるとおり、一家族における近世から近代への推移の様相に着目しており、山川家の各人、とりわけその姉妹たちが信念を以て、それぞれの生を全うしていく様はよく伝わるも、そうした個性的または個別的な女性の生き方を、相対化し得るような視点も必要であろう。本文においても幾度か著者によって但書付きで述べられる、山川姉妹たちの持つ会津の土風に則った志操や（女子）教育観にある、ある種の柔軟性のようなものを追究することは、歴史学から離れてしまうかも知れないが、興味深い研究課題ではないだろうか。

最後に、受賞理由 2 でも述べた親族ネットワークについて、これが果たして山川家の近代化の隠れた推進力であったかどうか、後続の研究が俟たれる。

以上、本書に続き、今後ますますの研究の発展を、選考委員一同期待したい。

(報告：福田委千代 学内選考委員)